

毯、俗云花毛氈也、今用太木綿絲織花文、比真毯不野、

〔令義解職一見〕内藏寮

頭一人掌略○中氈謂燃毛爲褥席及別勅用物事、

〔運歩色葉集毛〕毛氈

〔倭訓栞中編二十六〕もうせん 毛氈の音なり、花毛氈は大花毛氈なりといへり、絨毯とも見ゆ坐

氈も遵生八牋に見えたり、

〔類聚名物考調度四〕毛氈 もうせん

是は古への毳ウモの類也、古へは今の西土より來れる毛氈はなし、毛布を用ゆ、今のもんば、とろめんの類也、毛氈はもと西土より來る、今は此方にて織織こと也、いづれも獸毛をもて作れる物故、神事には用まじき事也、南嶺遺稿に毛氈の事をいへるに、法曹類林百十七卷にあるよしいへるは、例のあざむき事なれば信じがたし、その書今ほるびたり、

氈種類

〔正倉院御寶物之圖〕御寶物目錄記寸尺者、以金尺新量之

毛氈 四十枚 内一枚白、十九枚繪、十五枚赤白紫、五枚赤白、

〔延喜式十二主〕年料所須略○中 緋氈二枚、並隨損請換、

〔國師日記〕一芳札令拜見候爲御音信紅氈二枚、芳惠遠路御懇志之至、過分ニ存候略○中

十月十○慶長十七年 十三日

遍照光院

金地院

一同九○慶長十年十月廿三日、高野行人中使僧正覺院、五大院來臨、行人中十月廿日之狀來、并紅氈廿枚來、一八月七○元和二年、紹高七月十九日之狀來略○中 眞乗方は紅氈八十まい借用申度候、奉頼之由

申來ル、